

# 挑む!

子どもの貧困に取り組む門真市職員

のりゆき  
小西 紀至さん(37)

## 脱「縦割り」 シグナル逃さない



大阪府門真市出身。2004年、同市役所に入庁。教育委員会や総務部などを経て、市子ども政策課子どもの生活支援担当副参事を務める。

靴下の左右が頻繁に違う。冬なのに夏服のまま。遅刻が多い――。週1回のケース会議。大阪府門真市役所に元教員や福祉の専門家が集まる。子どもの状態から伝わる断片的な「シグナル」をつなぎ、どう対応するか。行政側の責任者として苦悩の日々を送る。府内で大阪市に次いで生活保護受給率が高い門真市。昨秋、新たな子どもの貧困対策として、関係機関の連携強化と、地域のボランティアが情報を寄せる市民参加型の支援モデル事業が始

まり、「畑違い」の総務部から、ただ一人の市の担当者として異動した。

学校、児童相談所、生活保護の担当課は縦割りになりがちだ。「情報に『横串』を刺さないと、何も動かない」。2カ月近く交渉を繰り返す、情報共有の意識を徹底した。

不登校児の保護者と連絡が取れなくなったと情報があれば、現場へ。公的支援が必要なのか、虐待のケースなのか。関係機関に問い合わせ、総合的に検討する。深刻な事案は一人親家庭が多く、地域から孤立している実態もわかってきた。ボランティア数は1月に目標の600人を上回り、公的支援につなげたケースも徐々に増えている。

自身も5歳の長男の父親だ。「苦しむ子どもたちを救いたい。何より必要なのは、地域の力なのです」

文・写真 池尻和生

記者から

子どもの貧困問題は深刻だ。地域一丸で取り組む「門真モデル」が全国的に広がってほしい。